

Hemingway の “Hills Like White Elephants” における 2 つの宗教

栗 山 裕 也

序

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の『女のいない男たち』(*Men Without Women*, 1927) には短編「白い象のような山並み」(“Hills Like White Elephants”)があり、次のような内容になる。スペインのエプロ渓谷 (the valley of Ebro) を流れるエプロ川 (the Ebro River) 付近には鉄道の乗換駅があり、物語の中心的な舞台になる。次に主な登場人物に注目すると、アメリカ人の男性 (American) と若い女性のジグ (Jig) を挙げることができる。バルセロナからの急行列車 (the express from Barcelona) が到着するまでにしばらく時間があるため、2人は駅構内に設置された軽食堂に立ち寄り、座席に座り、飲み物を注文し、飲み物を待つ間に話をする。しばらくして話が発展すると、2人の人間関係に関連する大変深刻な内容となる。アメリカ人は、ジグとの交際を続けるため画策をし、彼女にある提案をする。彼から思いもよらない提案内容を聞いた後、ジグは、次第に苛立ちを覚え、彼と口論となる。その後これ以上話すことはない判断し、話をやめる。そして、笑みを浮かべ、現在は極めて良い気分であるとアメリカ人に話す場面で、この作品の幕が閉じる。

最初に海外におけるこの作品の先行研究に目を向けると、次のような所見が存在する。カーク・カーナット (Kirk Curnutt) は、この作品には「不運な関係についてのヘミングウェイの最も有名な描写」(“Hemingway's most famous portrait of a doomed relationship” 90) があると主張する。

ジェフリー・マイヤーズ (Jeffrey Meyers) は、この作品を「ヘミングウェイの最も巧妙な物語」 (“Hemingway’s most subtle story” 196) と評価する。チャールズ・M・オリヴァー (Charles M. Oliver) は、この作品の題名について意見を述べる際、「題名の意味は、あいまいである」 (“The title’s significance is ambiguous” 203) とする。リサ・タイラー (Lisa Tyler) は、題名を「詩のような題名」 (“poetic title” 77) として、この作品の難解な本質を理解する上で欠かすことができないと持論を展開する。現在でも海外ではこの作品に関する活発な議論が展開されている。

次に国内の研究に注目すると、これまでに積み重ねられてきた多種多様な論が存在する。今村楯夫氏は、この作品中の風景について「きわめて実用性をもちながら、あまりに象徴的」(106) と主張する。小林由紀氏は、村上春樹氏の「カンガルー日和」を例に挙げ、『『カンガルー日和』における『白い象のような山並み』の受容」(87) を主張する。谷口義朗氏は、アメリカ人とジグの人間関係について考察を行った結果、「悲劇的な側面が存在する」(9) と提唱する。橋本賢二氏は、この作品がアメリカ短編小説において「最初の大きな貢献」(80) をしたと評価する。国内においてもこの作品の内容についての興味深い研究が尽きることはない。

しかしこの作品の解釈において、アメリカ人の宗教観とジグのそれを比較、検討する研究は少ない。そこで本論は、登場人物アメリカ人の行動とジグのそれを比べ、彼らがすれ違う理由を浮き彫りにし、それぞれの宗教観の違いを考察する。

I. アメリカ人

最初は、アメリカ人の行動について考察を行う。というのも、アメリカ人は、この作品の中では重要な役割を果たす登場人物であり、作品解釈において彼の存在を決して看過することはできないためだ。

アメリカ人は、ジグと共に鉄道駅内にある軽食堂に入り、店員にビールを注文する。ビールを飲みながらジグとたわいもない話をしている。その

最中、ジグは、窓越しに風景を見つめる。そして、アメリカ人は、ジグの次のような発言を聞く。

“They look like white elephants,” she said.

“I’ve never seen one,” the man drank his beer.

“No, you wouldn’t have.” (50; underline mine)

アメリカ人とジグとの会話に登場する「白い象」(“white elephants”)は、この作品の本質を考える上で無視することができない大切な言葉であり、アメリカ人の心の内を予告する。象の肌が白色であることの意味を考えると、ジグへの愛情が枯渇したアメリカ人の心そのものとなる。白色には、「つめたさを表す。暖かさのない光、つめたい愛」(フリース 687)の意味がある。このようなアメリカ人の心のあり方が作品解釈に対して多大な影響を及ぼす。アメリカ人とジグとの会話の中に登場する白い象への言及は、この作品の主題の一つである重要なアメリカ人の冷淡な心のあり方を読者に提示するのである。

鉄道駅内にある軽食堂の様子を見ると、アメリカ人とジグは、冷えたビールの感想を話しながら時間を過ごす。しばらく時間が経過した後、アメリカ人は、ジグに次のような話をする。

“The beer’s nice and cool,” the man said.

“It’s lovely,” the girl said.

“It’s really an awfully simple operation, Jig,” the man said. “It’s not really an operation at all.” (52; underline mine)

アメリカ人の話の中に出現する“operation”は、手術を示唆する。ここでは、ジグの身体に影響が及ぶ外科手術、即ち、人工妊娠中絶手術を指す。その言葉の背景には、ジグの「胎児や妊婦」(今村、島村 105)がある。ジグにとってこれから生まれる胎児は、自分の大切な子供であるにもかかわらず、アメリカ人にとってはジグとの関係を阻害する存在と映る。アメリカ人の頭の中は、ジグとの関係を継続させることに集中していて、それ

以外のことを考えることができない状況にある。彼女との関係継続のためにこの時点で最善と思われる方法を検討した結果、彼女に手術を行い、胎児の存在をこの世から完全に抹殺することが一番良いと考え、ジグに手術のことを説明する。ジグとの関係を維持するため、アメリカ人は、ジグに人工妊娠中絶手術の話を持ちかけるのである。

“operation” には他にも意味があり、人生の途中でアメリカ人が置かれた現在の状況を示す。OED 7.a. でこの名詞は「一連の軍事上、もしくは戦略上の活動。作戦行動」(“A series of warlike or strategic acts; a movement” 849) の意味がある。この場面におけるアメリカ人の現状を考えると、彼は人生の重大な分岐点にいる。彼の計画では、ジグが人工妊娠中絶手術を受諾して手術が終了した後は、自分が危惧する交際での問題が一気に解決し、目の前が開けて万事が好転し、彼女との付き合いがこれから先も続くと思える。そしてジグからの猛反対が発生しないよう、言葉を慎重に選びながら、彼女に話しかける。ジグに手術を了承させる計画が成功するには言葉一つも疎かにできないのを理解するため、このような難局を無事に乗り切ることができるよう、アメリカ人は、人生で最大の作戦行動を計画し、慎重に慎重を重ねながらジグに話しかけるのである。

アメリカ人の発言において人工妊娠中絶手術の難易度を示す “simple” には、彼の重要な企てが隠されている。その形容詞が指す内容によると、手術には難しい点は何も存在せず、ごく短い時間で終了するのを意味する。アメリカ人は、手術のことを予め調べた結果、妊婦の人体に大変危険なところもあり、一筋縄ではいかないことを認識する。そこでジグには手術が大変容易であることを前面に出し、2人の幸福な関係を続けるためにこのように素晴らしい手術を受けない手はないと話し、ジグの警戒心を解き、彼女が進んで手術を受けるようにする。アメリカ人がこの手術内容を “simple” 以外ありえないと主張とするのは、彼の心の中においてジグが人工妊娠中絶手術を必ず受諾するよう導こうとするためである。

手術の内容を修飾する形容詞 “simple” には、さらに別の意味がある。ジグに人工妊娠中絶手術を勧める中でアメリカ人がその形容詞を使用した

のには、彼女に対するアメリカ人の評価が隠されている。これまでの人生経験から熟考すると、アメリカ人は、ジグには世慣れていないところがあると見抜き、彼女がその手術の詳しい内容を認識することができないと思う。そのために、手術のことを話す際には手術において発生するかもしれない悪い可能性をひた隠し、自分の本心を彼女に悟られないように気を付ける。アメリカ人がジグに彼女が将来受ける手術が “simple” と説明するのは、ジグがこの手術に関して詳細な知識を持たないと見定めたためである。

アメリカ人は、これから行われる手術が極めて単純であるとジグに話を続ける。そして手術のことについて、次のようにも主張する。

“Well,” the man said, “if you don’t want to you don’t have to. I wouldn’t have you do it if you didn’t want to. But I know it’s perfectly simple.”

“And you really want to?”

“I think it’s the best thing to do. But I don’t want you to do it if you don’t really want to.” (52; underline mine)

アメリカ人の発言「しかし完璧に単純なことを知っている」(52)には、人工妊娠中絶手術に関するアメリカ人の本音が出る。アメリカ人は、ジグがこれから受ける手術内容について心配することも予め計算している。ジグとの交際を続けるには彼女の手術承認が大前提となるため、どのようにしたら彼女が手術を承諾するかについて策を巡らせる。そしてしばらく思考した後、彼女の心から不安を取り除き、彼女が手術を受けるよう、手術が極めて簡単であることをひたすら強調する作戦を実行する。ジグに対するアメリカ人の発言の中で手術の内容に関して副詞 “perfectly” が付け加えられたのには、彼女が手術で気がかりに思うことを払しょくさせ、何としてでも手術を受けるよう促すためである。

人工妊娠中絶手術後には2人にとっての幸福が訪れると話を進める中で、アメリカ人は、ジグから手術の内容に関するさらなる意見を求められる。

そして手術に関する意見について次のように話をする。

“If I do it you won't ever worry?”

“I won't worry about that because it's perfectly simple.” (53; underline mine)

アメリカ人の返答には、人工妊娠手術への内容に関する彼の心が現れる。心の底から心配をするジグに対し、彼の発言にある「悩まないだろう」(53) は、表面上は心配していないことが表されるが、その発言の裏側には心の不安が隠されている。というのも人間が行うことには完全はなく、ジグの手術も同様に手術自体が失敗することもある。さらにアメリカ人は、ジグが手術自体を断る可能性が十分あり、彼女が断る可能性を完全に排除することはできないと思う。そのためにアメリカ人の心には不安感が増し、発言に影響を与える。そしてこの深刻な事態を開く新たな策を考えるが、現時点においては良い考えが浮かばない。そのために “I will not worry about that” と強い発言を口にできず、“I won't” と一般的な否定の意思を伝えるに留まる。アメリカ人がジグに対する返事で強く否定を行わないのは、自分にとって有利に展開しようとしないうる苦しい現状に直面し、心の中に強い苛立ちが存在するためである。

手術についての話が進む中、ジグは、アメリカ人にビールのお代わりを注文するよう頼む。アメリカ人は、そのことに同意する一方、ジグが手術を受けようとせず、自分が置かれた状況が好転しないことに次第に苛立ちを覚える。そして次のように話をする。

“Doesn't it mean anything to you? We could get along.”

“Of course it does. But I don't want anybody but you. I don't want any one else. And I know it's perfectly simple.” (54; underline mine)

発言の中でアメリカ人が人工妊娠中絶手術の内容において容易さを繰り返すには理由がある。ジグが手術のことについて執拗に疑うため、アメリカ

人は、言葉に詰まる。さらに手術の安全性については絶対的な自信を持つことができないため、次第に返答に詰まる。しかしジグの口から拒否の言葉が出てこないよう最大限配慮し、手術が極めて安全で、何も問題がないと何度も主張する必要があると判断を下す。そこで上記のような発言をし、現在目の前にある危機的な状況を打開しようとする。そしてジグに手術を受けさせるため、手術が安全であると再度説明する。アメリカ人が手術の安全面のみを繰り返して説明するのは、ジグとの将来の交際において、自分にとって一番有利と思われる状況を作り出し、彼女との付き合いをこれから先も続けるという自分の欲望を満たすため、ジグの身体状況を考慮せず、科学的な根拠なしで人工妊娠中絶手術が安全であると言い続けた結果である。

ジグの人工妊娠中絶手術に関係し、アメリカ人は、アメリカ合衆国の法律を基本にして行動する。勿論、彼は、アメリカ出身で、アメリカの法律に影響を受ける。同国の法律に照らし合わせると、人工妊娠手術は、法に適合する。手術の合法性は「条件つき」(斎藤眞 [ほか] 611)ではあるが、「1973年1月22日の連邦最高裁判所の判決で、中絶の決定権が個人のプライバシーの権利として認められて以来、合法化されている」(上智学院新カトリック大事典編纂委員会 981)。人工妊娠中絶手術をアメリカの国の法律に照らし、違法性はないと判断するため、アメリカ人は、ジグに人工妊娠中絶手術を受けるよう、あの手この手で承諾を迫るのである。

また人工妊娠中絶手術をジグに重ね重ね勧めるアメリカ人の行動を探索すると、彼の宗教観を表面に出すことができる。彼の人格を形成する背後には、彼自身の宗教観が存在する。彼の人生観を考察すると、プロテスタント諸教会(Protestant)の影響力を避けて通ることはできない。その教派は、アメリカでは全人口の「35%」(上智学院新カトリック大事典編纂委員会編 166)を占める最大の宗教勢力である。その教派の中には「中絶を認める立場(『プロ・チョイス派』…」(大貫 [ほか] 745)が存在する。他方、個人においても「中絶を認めるキリスト教徒がいる」(リヴィングストン 661)。そのような宗教的な背景の中で育ったため、アメリカ人は、

自分の宗教観を心の支えとして、ジグに人工妊娠中絶手術を躊躇なく薦めようとする。現在のアメリカ人の宗教観を支えるのは、教義においてプロ・チョイスを掲げるプロテスタント諸教会の教えである。

Ⅱ. ジグ

アメリカ人続いて、ジグの宗教観についてについて彼女の行動面から考察する。ジグは、この作品の内容を解釈するにあたり欠かすことができない。というのも、この作品において固有の名前が与えられていて、アメリカ人とは異なる生き方を読者に提唱することができるためだ。

では、ジグの行動を見てみよう。この作品の文頭において、舞台の紹介がある。そこはスペインのエブロ渓谷で、谷間には鉄道の駅舎があり、そこから物語が展開される。その舞台の詳しい様子は、次のようである。

The hills across the valley of the Ebro were long and white. On this side there was no shade and no trees and the station was between two lines of rails in the sun. (50; underline mine)

鉄道駅における線路の形状への言及に注目すると、ジグの思いとアメリカ人とのそれが見えてくる。線路の形状は、2本の並行するレールからなり、その上を急行列車等が走る。列車が走るためには2本のレールが平行でなければならず、レールが平行でなくなると、列車は、その上を走ることができず、脱線事故が発生する。レールが平行であるように、アメリカ人の人生観とジグのそれが交差せず、どこまでも平行線をたどり、決して交わることはない。この作品における2本のレールを持つ線路への言及は、2人の将来がこれから先も平行線のままで、交わる気配がないことを予告するのである。

また、この作品の舞台がスペインに設定されたのにはジグの宗教的な思想を理解するために意味がある。同国の宗教の状況を考えると、「96%がカトリックの信者」（上智学院新カトリック大事典編纂委員会 548）であ

る。その宗教は、ヘミングウェイ自身の信仰とも関係がある。この作品ができた当時、ヘミングウェイは、父親クラレンス (Clarence, 1871-1828) が所属するプロテスタントの「第一組合 (会衆派) 教会」(今村、島村 767) に所属していた。しかし 1927 年のポーリー・ファイファー (Pauline Pfeiffer, 1895-1951) との結婚の際に改宗を行い、「カトリック信者」(今村、島村 768) になり、カトリックの信仰と共に生きた。スペインがこの作品の舞台になったのには、ジグが信仰する宗教の背景を説明する上で、欠かすことができないためである。

この作品の舞台となる鉄道駅の様子を見ると、軽食堂の内部への言及がある。その内容は、次のようである。

Close against the side of the station there was the warm shadow of the building and a curtain, made of strings of bamboo beads, hung across the open door into the bar, to keep out flies. (50; underline mine)

軽食堂の窓に掛かる竹製のビーズでできたカーテンへの言及があるのは、ジグの宗教を知る上で意味がある。ビーズは、聖母マリア (the Blessed Virgin Mary) への祈りの際に使用されるロザリオの材料で、勿論カトリックの教義と関係が深い。ロザリオは、カトリックの聖母崇敬と関連があり、「聖母マリアを連想させる」(疋田 210)。カトリックの教えでは、聖母を人類の救い主イエス・キリスト (Jesus Christ) 誕生に貢献した一番の人物と考え、聖母に向けられる特別な崇敬の念がカトリック信者の心の中に存在する。そのために信者が聖母に祈る際には、ロザリオが使用される。ジグも聖母を大いに崇敬するため、軽食堂のカーテンを見た際に、聖母への強い思いが彼女の心の中に現れる。軽食堂のカーテンに掛かるビーズへの言及は、ビーズがロザリオを思わせ、カトリック教会が教える聖母マリアに対するジグの真摯な宗教的態度を表す。

駅舎の中にある軽食堂に入ったアメリカ人とジグは、ビール大ジョッキを 2 人分注文する。注文したビールを待つ間、ジグは、アメリカ人と話を

する。その際に次のような行動を取る。

The girl looked at the beads curtain. “They’ve painted something on it,” she said. “What does it say?” (51; underline mine)

この場面において、ジグが視線をビーズのカーテンに向ける行動を見ると、カトリック教会の教えにおいて、万能の聖人である聖母マリアに対するジグの並々ならぬ思いが分かる。ジグは、聖母が実に頼りがいがあり、自分の人生にはなくてはならない存在と心の底から認める。また、天における聖母の役割をもよく知る。イエスの誕生に大いに貢献するのが聖母であり、聖母の活躍は、しばしば芸術に登場する。イエスの誕生に対する聖母の献身的な姿は「受胎告知」（船本 112）にしばしば描かれる。その絵画において、聖母は、天使ガブリエル（Gabriel）から人類の救い主イエスの誕生の予告を聞き、祝福を受ける。そして聖書において「恵まれた方」（ルカによる福音書 1:28、新 50）と呼ばれる。その際に聖母は「静かにすべてを受け入れた」（船本 112）。このように神を思う聖母の真摯な心遣いなしでは、イエスの誕生を考えることはできない。その後、世界でキリスト教の教えが広がる中、聖母は、イエスの一番の理解者となり、キリスト教の教えに従い、生涯を全うした。そのような聖母のたぐいまれな心意気が天に届いたため、聖母の最期には次のような出来事が起きた。「イエスおんみずからが、天の軍勢をひきいて迎えに出られた」（ウォラギネ 213）。そして聖母は、イエスと共に「大きな栄光につつまれて天にのぼられた」（ウォラギネ 213）。この出来事は、聖母の「被昇天」（諸川、利倉 52）と呼ばれる。聖母が被昇天した後、「戴冠」（諸川、利倉 110）を経て、偉大な「天の女王」（諸川、利倉 110）となり、現在に至る。ジグがビーズのカーテンを真剣に見つめ、聖母を意識するのは、ビーズがジグにロザリオを連想させ、ロザリオの祈りを通じて偉大な聖母マリアが自分の願いを聞き入れ、自分の願いが神に必ず届けられるよう心の底で強く意識するためである。

鉄道駅の軽食堂内で話が進行する中、ジグは新しい飲み物を飲みたいと

話す。その後、室内から外を見て、窓越しに映る山の様子を次のように話す。

The girl looked across at the hills.

“They’re lovely hills,” she said. “They don’t really look like white elephants. I just meant the coloring of their skin through the trees.”

“Should we have another drink?”

“All right.”

The warm wind blew the bead curtain against the table. (51-52; underline mine)

軽食堂内において風で揺れるビーズでできたカーテンへの言及は、天の意思と連動する。ジグは、アメリカ人との付き合いを続けた結果、妊娠し、自分自身と胎児が危機的な状況にあると感じる。そこで自分にとって大変身近な存在である聖母マリアを思い出し、自分と子供に神からの救いがあるよう聖母に取次ぎを求める。取次ぎは、神と人間との仲立ちをし、神が人間の願いを成就させるよう誠心誠意懇願する聖母の行動を指す。言うまでもなく、聖母は「神と人間との間のとりなし役」(上智学院新カトリック大事典編纂委員会 818)であり、カトリックの教えによると聖母以上に偉大な聖人は存在しない。聖母からの取次ぎを受け、ジグの心を理解した神は、天から風を吹かせ、軽食堂のビーズのカーテンを揺らし、ジグの救済に対する天の真意を伝える。風で揺れるカーテンへの言及は、聖母マリアの取次ぎを受け、ジグを救おうとする神の意思の現れである。

アメリカ人は、2人の関係が続けるにはある手術が必要で、その後は今まで通りにうまくいくと話をする。その話を聞いたジグは、次のような行動を取る。

“We’ll be fine afterward. Just like we were before.”

“What makes you think so?”

“That’s the only thing that bothers us. It’s the only thing that’s

made us unhappy.”

The girl looked at the bead curtain, put her hand out and took hold of two of the strings of beads. (52; underline mine)

ここの場面においてカーテンを見つめ、ビーズを手にするジグの行動の裏には、聖母マリアに向かう偽りのない心がある。この場面で登場するビーズは、「ロザリオ」(疋田 214)を象徴し、聖母を一貫して敬うジグの本音を表現するためにはなくてはならない。カトリック教会の教えの中には、聖母を人類にとって大切な存在と見なし、特別な崇敬を行う。聖母を敬う方法として、「ロザリオの信心」(上智学院新カトリック大事典編纂委員会 813)がある。ロザリオは、ビーズ (bead) でできた祈りの道具で、聖母に対する個人の祈り「信心行」(八木谷 64)を実践する際に用いられる。ジグがビーズでできたカーテンを見るのは、万能の聖人である聖母マリアが行う取次ぎの力を心の底から何度も意識することを表現するのである。

乗客がマドリードに向かう列車の到着を待つ中で、アメリカ人は2つの重い鞆を駅の乗降場まで運んだ後、軽食堂に戻る。食堂の中を見ると、酒を飲みながら列車の到着を待つ乗客がいる。ビーズのカーテンを抜けると、席に座り、微笑むジグを発見する。そこでジグは、自分の気持ちについて次のような発言をする。

Coming back, he walked through the barroom, where people waiting for the train were drinking. He drank an Anis at the bar and looked at the people. They were all waiting reasonably for the train. He went out through the bead curtain. She was sitting at the table and smiled at him.

“Do you feel better?” he asked.

“I feel fine,” she said. “There’s nothing wrong with me. I feel fine.” (55; underline mine)

この場面でジグが自分の気分をアメリカ人に話すことは、彼への最終通告

に等しい。これまでアメリカ人の話を聞き、物事を自分で考えた結果、アメリカ人との付き合いは、百害あって一利なしと判断する。アメリカ人の胎児の生命に対する考え方は、自分の気持ちと著しく異なり、お互いの考えはこれから先も決して一致することがないと結論を出す。自分と胎児の将来を考えると、アメリカ人ときっぱりと別れることが最善の策とし、自分の心の中にある迷いを吹っ切ろうとする。その結果、アメリカ人から自分を聞かれると、素晴らしい気分であると迷うことなくジグは、発言する。ジグの口から出た気分爽快を意味する言葉は、アメリカ人からの再三にわたる悪の誘惑である人工妊娠中絶手術を躊躇することなく断り、希望を自分自身の中に見出し、自分自身の新たな人生を歩もうとするジグの強い意志から出たのである。

アメリカ人と別れ、自分の道を歩もうとする姿勢の裏には、ジグ自身の大切な宗教であるカトリックの信仰心がある。アメリカ人との付き合いを続けるのか、それとも胎児と共に生きるのかは、ジグの人生にとって重大な選択となる。特に重大な問題となるのが人工妊娠中絶手術で、ジグが避けては通ることができない。カトリック教会は「中絶を認めない立場（『プロ・ライフ』）」（大貫〔ほか〕745）を取り、女性の生命に危険が生じる場合を除き、そのような手術に対し一貫して反対する。ジグがアメリカ人と話をする中で熟考に熟考を重ねた結果、胎児の生命軽視に通じると解釈することができる人工妊娠中絶手術に一貫して異議を唱えるカトリックの教えに従うことで自分が成長することができるかと確信する。加えて、信仰心を大切にすることで将来において多大な益をもたらすと気づき、アメリカ人との別れを決断する。ジグがアメリカ人と付き合いを止めて自分の信じる道を進もうとする心の支えとなるのは、ジグ自身が心から信じるカトリック教会の教えである。

結論

この作品を分析した結果、次のような結論が導き出された。アメリカ人

の行動の背景を考えるとアメリカ人は、アメリカ的な価値観を胸に秘めながら人生を生きようとする。例えば、ジグの人工妊娠中絶手術に関して、同国の法律や人工妊娠中絶手術を認めるプロテスタント諸教会の中の一教派の教えに従い、行動する。そのために、そのような手術を絶対的な悪とせず、自分の最終的な目的であるジグとの交際を続けようとするため、ジグが人工妊娠中絶手術を受けるよう誘いの言葉を再三繰り返す。この作品におけるアメリカ人は、アメリカ的な価値を代弁し、同国の価値観を心に抱きながら行動する人物である。

続いてジグの行動理由を考えると、ジグは、神を崇拝し、聖母マリアを心の底から崇敬する。また、自分が信じる宗教、カトリックの教えを大事にするため、アメリカ人から人工妊娠中絶手術を何度迫られても、手術を承諾せず、胎児と共に生きようと決意する。胎児の生命を蔑ろにしても2人だけの付き合いを続けようとするアメリカ人と自分の将来のことを比較考慮した結果、宗教的背景が大いに異なるアメリカ人と別れるのが一番と結論を出す。その結論に至るまでには、自分の意思に加え、神の助けが必要不可欠と理解するため、ジグは、万能の聖人である聖母マリアを何度も意識し、神への取次ぎがあると信じ、自分の行動指針とする。ジグの行動を背後から支えるのは、神と聖母マリアである。

アメリカ人の行動内容とジグのそれを比較すると、プロテスタント諸教会とカトリック教会との現状を推し量ることができる。この作品に登場するアメリカ人とジグは、それぞれが異なる思いを抱くため、2人の心が和解に至る気配がないため、最終的に2人は、交際を止め、別々の人生を歩もうとする。人工妊娠中絶手術に関する話の事例を挙げると、アメリカ人が支持するプロ・チョイスの教えとジグが支持するプロ・ライフの教えがお互いにぶつかり合い、一つになることない。2つの意見が事あるごとに対立を繰り返し、一致することがない様子は、鉄道駅においてこれから先も交差せず、並行であり続ける2本のレールが存在する状況と重なる。このようなアメリカ人の行動とジグとそれとの違いは、プロテスタント諸教会とカトリック教会の間における長年に及ぶ教義の解釈の違いと類似する

点があり、キリスト教において 2 種類の異なる宗教が現在も対立関係のまま存在する状況を象徴するのである。

注

* 本論における引用は、Ernest Hemingway, “Hills Like White Elephants,” *Men Without Women*. Scribner's, 1997. を使用し、ページの終わりの括弧内にページ数を記入する。

現代の事情から考えると、作品中には不適切な表現が存在するが、この作品の時代性と著者の意図を鑑み、そのままの表現を用いる。

Works Cited

- Curnutt, Kirk. *Ernest Hemingway and the Expatriate Modernist Movement*. The Gale Group, 2000.
- Hemingway, Ernest. “Hills Like White Elephants.” *Men Without Women*. Scribner's, 1997.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. Da Capo Press, 1985.
- Oliver, Charles M. *Critical Companion to Ernest Hemingway: A Literary Reference to His Life and Work*. Facts on File, 2007.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 20 vols. Clarendon Press, 1989.
- Tyler, Lisa. *Student Companion to Ernest Hemingway*. Greenwood Press, 2001.
- 今村楯夫、島村法夫監修『ヘミングウェイ大事典』、勉誠出版、2012.
- 今村楯夫『ヘミングウェイの愛したスペイン』、風濤社、2015.
- ウォラギネ、ヤコブ・デ『黄金伝説』、全4巻、前田敬作、今村孝訳、平凡社、2006.
- 大貫隆 [ほか] 編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002.
- 小林由紀「村上春樹『カンガルー日和』における『カンガルーの赤ん坊』の表象と『日和』の意味——ヘミングウェイの『白い象のような山並み』の受容から読み解く」『比較文化研究』、134号、2019. pp. 83-96.
- 斎藤眞 [ほか] 監修『アメリカを知る事典』、新訂増補版、平凡社、2000.
- 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』、全5巻、研究社、1996-2009.
- 聖書——新共同訳、旧約統編つき、日本聖書協会、1996.
- 谷口義朗「ヘミングウェイの『白い象のような山並み』」『英米文学英語学論集』、第4巻、2015. pp. 1-10.
- 橋本賢二『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄——二十世紀作品集』、大阪教育図書、1995.

疋田知美「コーパスと文学的想像力で見えるジグに訪れた光——“Hills Like White elephants” 論」『水と光——アメリカの文学の原点を探る』、入子文子監修、谷口義朗、中村善雄編、開文社出版、2013. pp. 201-24.

船本弘毅監修『一冊でわかる名画と聖書』、成美堂出版、2011.

フリース、アト・ド『イマージ・シンボル事典』、山下主一郎〔ほか訳〕、大修館書店、1984.

諸川春樹、利倉隆『聖母マリアの美術——カラー版』、美術出版社、1998.

八木谷涼子『なんでもわかるキリスト教大事典』、朝日新聞出版、2012.

リヴィングストン、E. A. 編『オックスフォードキリスト教辞典』、木寺廉太訳、教文館、2017.